



令和8(2026)年2月6日

校長だより Vol.13

令和8年度入学者選抜に向けて ～「例年通り」を脱却し、変化への対応と確実な校務を～

いよいよ今年度の入学者選抜に向けた業務が本格化します。静岡県では、令和9年度のWeb出願完全実施を見据え、今年度もデジタルとアナログが混在する「ハイブリッドな運営」が続きます。

入試業務は年に一度の限られた期間の業務ですが、生徒の進路を左右する、学校経営において最もミスが許されない最重要業務です。全教職員が以下の3点を強く意識し、万全の態勢で臨んでください。

1. 「慣例」ではなく「実施要領」が唯一のバイブル

入試制度は今、変革の過渡期にあります。「去年はこうだった」という経験則は、時として思い込みによるミスを生じます。必ず最新の「入学者選抜実施要領」を熟読し、常に原本に立ち返ってルールを確認してください。

手引きを「読み込む」ことこそが、最大の防衛策です。

2. 「ミスゼロ」を支える多重チェックの徹底

入試業務において「ミスがない」ことは、プロとして当たり前の到達点です。

一人の確信よりも、組織としての確認を優先してください。ダブルチェック、トリプルチェックを形式的なものにせず、異なる視点から厳格に確認し合う風土を徹底しましょう。(入試業務のスタンダードとしましょう!)

3. 「ハイブリッド運営」への柔軟な対応

Web出願への移行期は、事務作業のフローが複雑になりがちです。新しいシステムへの理解を深めると同時に、不明な点は放置せず、組織内で即時的に共有し、解決していきましょう。

「生徒の夢を次につなぐ」という重い責任を分かち合い、全教職員が一丸となって、厳正かつ円滑な入試運営を実現しましょう。気を遣う業務が続きますが、よろしくお願いします。

「同じ星を見て歩いていきましょう!⑭」 ～『叱れない大人と叱られてこなかった若者』～

1月21日(火)20:00~21:00 放送「踊る!さんま御殿!!」(日本テレビ)が放送され、ゲストには青山学院大学の原晋監督が出演し、番組では「ちゃんと叱れない大人と叱られてこなかった若者」をテーマに展開されました。

多くの方が御存じであると拝察しますが、先日青山学院大学は、箱根駅伝で2度目の3連覇(3年連続9回目の総合優勝)を達成し、往路・復路・総合すべてで大会新記録を樹立しました(2026年1月時点)。2015年から2018年にかけては4連覇も達成しており、過去12年で9回の優勝を誇る黄金時代を築いています。

『ちゃんと叱れる』代表として、出演した原晋監督は、教え子を叱る時に言いがちな『帰れ!!』という言葉について、MCの明石家さんまから、「先生も言ったことがある?」と聞かれると、「ありますよ。」と即答しました。

「やっぱり、その子の本気度、覚悟を持たせるためのある意味、励ましの言葉なんですね。

本心から『帰れ!! おまえ、出ていけ。』なんてことは一切思ってないです。昭和の表現方法なので、今の令和の時代にはちょっとそぐわない気がしますね。」と続けた上で、「親にもよるんですね。保護者からお子さんを預かっているの。『うちの息子には何を言おうと、何をしてもいいよ。殴ってもいいよ。』って言う親に限って、躰(しつけ)がキチンとしていますから、一切、指導することはないですね。」と話していました。

誤解がないように書いておきますが、あの原晋監督も仰っていることなので、生徒に対して、『帰れ!!』と言ったり、場合によっては(親が同意すれば)殴ったりしていい…、と言っているわけではありません。悪しからず…。





『叱られてきていない』からこそ、時に、何の悪気もなく相手に失礼な振る舞いをしている若者（生徒）に対して、私たち教師は、『何を』『どこから』『どんなふうに』指導すると良いでしょうか。

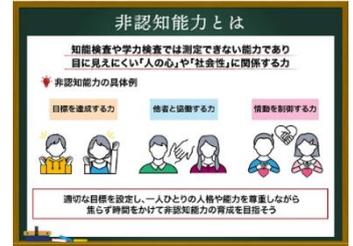
それって家庭でやるべきことだと言ってしまえばそれまでですが、**今時の生徒はそんな感じだから…** で片付けてしまったとしたら、その後の人生で、彼らのことを本気で正してくれる『誰か』に出会えるものなのでしょうか。先生方は、授業やクラス経営の際に、そうした場面に遭遇することはありますか。そして、その時どうしていますか。『叱り上手』な方は、『褒め上手』でもあります。どちらも、よく見ていなければ出来ません。

「同じ星を見て歩いていきましょう!⑮」 ～ 『高校生に身に付けさせたい力』 ～

これからの社会をいきていく若者（生徒たち）に身に付けさせたい力は、知識量よりも「知識をどう使うか」という実践的な能力が大切だと言われています。

これまで、先生方が意図的に取り組んでいるものについては、引き続きお願いします。

新たな視点を得たのであれば、具体的な方法を参考として、是非取り組んでみてください。



1. 非認知能力（やり抜く力、メタ認知） 『校長だより Vol.9 (11月号)』参照

【具体的な方法】 ●振り返り（リフレクション）の習慣化で自分の思考のプロセスを客観視させる。

●小さな成功体験の積み上げ…達成可能な目標設定（短期）で、自己効力感をUPさせる。

2. データサイエンス・AIリテラシー

【具体的な方法】 ●生成 AI の批判的活用…AI の回答はそのまま信じず、プロンプト（指示文）の質を上げる。

●統計データの可視化…身近な社会課題（Ex.地域の人口変動など）をグラフ化し、分析する。

3. 社会実装を伴う『探究力』

【具体的な方法】 ●地域課題解決型プロジェクト…企業や自治体との連携で、実社会のリアルな課題策を提案・実行。

●外部コンテストへの挑戦…『探究フェスタ』など、学校外のイベント等に参加して、多様な職種の人からのフィードバックを受ける機会を作る。



4. アダプタビリティ（適応力）とレジリエンス

【具体的な方法】 ●正解のない問いへの挑戦…「安楽死の是非」や「AI時代の雇用」など、多様な価値観が対立するテーマでディベートを行う。

●あえて失敗する環境づくり…試行錯誤が許容される『心理的安全性の高いコミュニティ』をクラス内に構築する。

5. 多文化共生、グローバル・シチズンシップ

【具体的な方法】 ●オンライン国際交流…海外の同世代とオンラインで共同プロジェクトを行い、異文化理解を深める。

●多角的な視点の導入…ニュースを複数の言語やメディアで比較し、情報の偏りを意識させる。

いずれも、これまで既習してきた学力（知識）を、使う本人が実践してはじめて「生きる『力』」のことです。

具体的な方法をいくつか示しましたので、教科指導、クラス経営、また、ともえタイムの場面で御活用ください。

意図した仕掛け（Gimmick）を用いることで、**身に付けさせたい『力』**は、より獲得しやすくなると思います。

こうしたアプローチと共に、目に見えないもの、クラスや学校の空気感を醸成していくことが、**『力』が付いていく**

自分と、『西高生で良かった』という実感を、相乗的に高めることに繋がるのではないのでしょうか。



レジリエンスとは？

